

# 非分離前綴 er- をもつ動詞に関する一考察

——特に「結果相」を表す er- 動詞について——

小 出 惇

A Study of German Verbs with The Inseparable Prefix “er=”  
— especially about the resultative er=verbs —

Jun KOIDE

## Abstract

German compound verbs with the inseparable prefix “er=” are brought up here for discussion with regard to their semantic features especially from the viewpoint of Aspect or Aktionsart. The aspect of the “verbs with the prefix er=” (hereinafter called “er=verb”) can generally be classified into two types: “inchoative” and “resultative”. The verbs, which we are dealing with here in the main, are “resultative er=verbs”.

The prefix “er=”, like the inseparable prefix “be=”, is capable of performing the grammatical functions all the more intensively, because the prefix itself has practically no meaning or significance. One of the grammatical functions of the prefix “er=” consists in deriving “transitive verbs”, each of which, in comparison with a transitive “be=verb” attended by an “accusative affectum object”, demands an “accusative effectum object” or an accusative object denoting a “substance possessed or to be possessed by a person as the subject of the given sentence”.

When such an “er=verb” involving the resultative aspect is paraphrased by using the relevant simple verb, the accusative object demanded by the er=verb, can be replaced with the appropriate “prepositional noun phrase”. Here arises the possibility that such er=verbs as are being discussed here can be semantically subdivided by means of the prepositions employed for the paraphrasing.

## I. 前綴 er- の概要

先に、大阪産業大学論集「人文科学編」76号・78号にて『be- 動詞に関する一考察』と題して「非分離前綴 be- をもつ動詞」を、主に H-W. Eroms による文献を参考にしながら、さまざまな観点から考察・検討したが、そこで得た結果を、ここで「非分離前綴 er- をもつ動詞」と比較し、検討する。というのも、前綴 er- は、前綴 be- と同じように、その主要機能の一つに、「他動詞化機能」、即ち、「対格補足語（目的語）を要求する動詞を造語する機能」をもつ文法化 (Grammatikalisierung) 作用の強い前綴であるからである。

この前綴 er- をもつ動詞（以下「er- 動詞」という）も、これまで内外の数多くのドイツ語研究者たちにより、「意味」の観点からは勿論のこと、「相 (Aspekt)」とか「動作様態 (Aktionsart)」などの観点から詳細に検討されてきている。

前綴 er- の「意味的解釈」に関しては、諸々のドイツ語辞典、特に小学館の「独和大辞典」、あるいは、橋本文夫著「詳解ドイツ大文法」に詳述されているが、それぞれの er- 動詞の「相・動作様態」の面からみた解釈に関しては、例えば Der Große DUDEN – Grammatik (1959年版) では次のように説明している。

前綴 er- は、特に、既存の動詞や形容詞に付して新たな動詞をつくる。

- ① 既存の動詞に付して「起動相 (inchoativ)」または「結果相 (resultativ)」の新しい動詞をつくる。起動相の動詞としては *erblühen*, *erblicken*, *erwachsen*, *erschrecken*, *sich ergießen* など、また、結果相の動詞としては *erbitten*, *ersteigen*, *erschlagen* などを例示することができる。

通常、もっぱら分詞の形で用いられるものとしては *erhaben* (← *mhd.* *heben*), *erlaucht* (← *leuchten*), *erstunken*, *erlogen* (尚、最後の2つは、一般に対句 “*erstunken und erlogen*” の形で用いられる) などが挙げられる。

- ② 形容詞から派生せしめた er- 動詞は起動相の動作様態を示し、その er- 動詞が他動詞であれば、それは作為動詞 (Faktitiv) の意味グループに与するものであり、例えば *erblassen*, *erkalten*, *erröten*, *erbittern*, *erschweren*, *ergänzen*, *erneuern* などを挙げるることができる。
- ③ その他の品詞から派生せしめた er- 動詞も散発的に見受けられる。例えば、名詞からの派生動詞では *sich ermannen* を、副詞から派生したものでは *erwidern* などを挙げるることができる。

更に、特筆すべきものとして、sterben, töten の意味内容をもつ er- 動詞が、その行為の手段・方法を表す語から自由に造語されている (ertrinken, ertränken, ersticken, erlöschen, ermorden, erdolchen, erdrücken, erschlagen, ersäufen など)。尚、sterben 及び töten を基礎動詞とした er-動詞 は転義されて用いられる。ersterben は「終わる・消滅する」を、ertöten は「(感情や欲望などを) 押し殺す」を意味する。

また、W. Fleischer は、彼の著 “Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache” において、er- 動詞と be- 動詞との間に於ける空間的意味の相違 — 例えば、Das Haus war erleuchtet. / Das Haus war beleuchtet. (これに関しては拙稿「be- 動詞に関する一考察」を参照されたい) — を指摘し、更に、相／動作様態の観点から次のように説明している。

完了相的動作様態 (perfektive Aktionsart) を示す er- 動詞としては erbauen, erdulden, erlernen, erretten, erschaffen, erdrosseln, ertrinken, erfrieren などが挙げられ、他方、起動相 (始動相; inchoativ, ingressiv), 即ち、「事象の開始」を示すものとしては erblühen, erwachsen などがある。これ以外に「別な状態への移行」を表す起動相の「形容詞派生 er- 動詞」には2つのタイプがある。その1つは「～にする」という意味内容をもつ er- 動詞 (erfrischen, erheitern, ermöglichen, ermüden, erschweren, erweichen など) であり、もう1つのタイプは「～になる」という意味内容の er- 動詞 (erblinden, erbleichen, erröten, erkalten, erlahmen, ermatten, erstarren, erwachen など) が挙げられる。

他方、「完了・結果相」の er- 動詞 (erarbeiten, erbitten, erkämpfen, erringen, ersparen) は、いずれも、対格補足語 (目的語) を要求するが、この対格補足語は、基礎動詞によりパラフレーズされる文では、前置詞格補足語として表される。

etw. erkämpfen    ⇔    um etw. kämpfen  
etw. erringen     ⇔    um etw. ringen  
js. etw. erbitten   ⇔    jn. um etw. bitten

W. Fleischer も一部引用しているものであるが、Erik Rooth は彼の研究論文 “Über die Ausdruckskraft und die Aktionsarten der deutschen Verbalzusammensetzungen mit *er-*” の中で、er- 動詞を「強意・完全相 (intensiv-exhaustiv)」 [= グループ A=eratmen タイプ] と「手段・結果相 (instrumental-resultativ)」 [= グループ B=erbinden タイプ] の2つの

グループに大別し、グループ A はその動詞が示す動作・行為の「程度・度合」を、グループ B はそれぞれの動作・行為の「やり方・種類」を表すものであるとし、さらに《動作様態の細分に関しては特にグループ A において確認し得るが、前綴が完了化作用を与えるのはグループ B の「結果相の er- 動詞」である》と述べている。

ここで筆者の興味の対象となるのは《自動詞を基礎動詞としたグループ B の er- 動詞》であり、就中、be- 動詞と比較し得る er- 動詞として、それを基礎動詞によりパラフレーズする場合に前置詞句を要求するものである。しかし、ここで付言しておかねばならないことは、be- 動詞の対格補足語は「被動目的語 (affiziertes Objekt)」であるのに対して、ここに問題とする er- 動詞が必要とする対格補足語は「被成目的語 (effiziertes Objekt)」か、あるいは「主語としての人物の所有物となるべき対象物」を指すということである。

- (1) …… die Politiker, die beispielweise in der Bundesrepublik soeben gemeinsam das Thema Entbürokratisierung erfunden haben und nun sehr überzeugend jenen undurchdringlichen Wust von Paragraphen *beklagen* – den sie selber täglich *erarbeiten*.  
[Süddeutsche Zeitung vom 5.6.1978]

文(1)のイタリック体の複合動詞をそれぞれの基礎動詞を用いてパラフレーズすると、次のごとくになるであろう。

- (1a) …… die Politiker, die …… *über* jenen undurchdringlichen Wust von Paragraphen *klagen*, *an* dem sie selber täglich *arbeiten*.

このようにパラフレーズされた文を原文と比較すれば明らかなように、be- 動詞を含む部分はパラフレーズした当該箇所と合致した表現と見做し得るが、er- 動詞をその基礎動詞にてパラフレーズした部分には「結果性」に係わる決定的な特徴が欠落していることが分かるであろう。

上の引用文では、結合価が2価の動詞が問題になっているが、3価の動詞 — 例えば、*erbitten*, *erflehen*, *erfragen* — の場合には、be- 動詞の場合に似た関係が認められる。

- (2) Otto bittet (Fritz) (um den Brief).  
(2a) Otto erbittet den Brief (von Fritz).

文(2)に関しては、H-E. Eroms は、文中の2つの括弧内の構成素のどちらか一方が要求されるが、文(2a)では Brief は対格補足語(目的語)として不可欠であることを指摘している。単一動詞 bitten の場合には、bitten という動詞が示す行為に重点が置かれており、その懇願・依頼(die Bitte)の成就・達成に関しては取り立てて云々するには及ばない場合が考えられるのに対して、複合動詞[文(2a)の erbitten]の場合には、その懇願・依頼のポジティブな結果が問題化する。換言すれば、erbitten を用いることにより「潜在的結果相」が可能になると考えられる。[bei jm.] um etw. *flehen* / etw. [von jm.] *erflehen*; jn. nach etw. *fragen* / etw. [bei jm.] *erfragen* などの場合にも同様の解説が可能になろう。

(3) Der Gefangene flehte um sein Leben.

(3a) Der Gefangene erflehte sein Leben.

(4) Er fragte sie nach ihrer Telefonnummer.

(4a) Er erfragte ihre Telefonnummer (bei ihr).

これらの er- 動詞は、先に述べたように、すべて Rooth の分類による「グループ B」に組み入れられるものであり、すべて2価の結合価を有するものである。これらは3価のものとは異なり、ほとんど例外なく「現実的結果性」を示すものである。これからして、文(5)及び文(6)

(5) Wir erjagen heute den großen Kragenbären.

(6) Wir erringen den Sieg!

の「現在時称」文は、いずれも「未来時称」を意味する場合にのみ許され得るものであろう。即ち、結果・完了相の場合の形態上の「現在」は「未来事象」を意味することになるが、このことは erjagen や erringen のような完了相の er- 動詞に関して考えられることである。換言すれば、完了相の er- 動詞は「完了時称」で用いられるのが一般に認められ得る用法と言えるであろう。

(5a) Wir haben gestern den großen Kragenbären erjagt.

(6a) Wir haben endlich den Sieg errungen.

以上のことから、「結果・完了相」の解釈は、通常、「余剰的な表層構造素性」が鍵を握っているものと推論される。このことは er- 動詞を造語する場合にも適用し得ることであり、単に「話題化 (Topikalisierung)」の通則に関するばかりではなく、前置詞格補足語に係る「結果相」の素性の導入を考慮した統語的な「造語の有意義性」を暗示している。

## II. 結果相の er- 動詞

ここで討議の対象となる er- 動詞は、諸々の観点から幾つかの下位グループに細分され得るが、Eroms は、Rooth/Kühnhold による分類表から「結果相の er- 動詞」として次の表に掲げたものを引用・列挙しているの、ここに紹介しておく。

「結果相の er- 動詞」と「基礎動詞 + 前置詞句」

[er- 動詞]	[意 味]	[基礎動詞 + 前置詞句]
erackern	あくせくして入手する; 耕して収穫する	ackern an
erangeln	釣り上げて手に入れる	angeln nach
erarbeiten	働いて手に入れる, 努力して身につける, 仕上げる	arbeiten an
erbauen	建設する	bauen an
erbeißten	噛みつく, 噛み取る	beißen nach
erbeten	祈願して得る	beten zu X um Y
erbetteln	乞食 (まで) して入手する	betteln um
erbitten	頼み込んで手にいれる	bitten X um Y
erblicken	目にとめる, 見つける	blicken nach
erbohren	掘り当てる, (ボーリングにより) 発掘する	bohren nach
erborgen	借り出す	borgen X von Y
erdenken	考え出す	denken an
erdichten	(架空のことを) 案出する, でっち上げる	dichten an
erdienen	尽力して求める	dienen um
erdringen	突進して求める	dringen nach
ereilen	急いで追い付く, 吸収する	eilen nach
ererben	相続で手にいれる, 受け継ぐ	erben X von Y
erfassen	つかむ, 捕らえる	fassen nach
erfechten	勝ち取る, 戦い取る	fechten um
erfeilschen	値切る	feilschen um X mit Y
erfliegen	飛行により達成する	fliegen nach

erflehen	懇願して求める	flehen X von Y
erforschen	探求する, 究明する	forschen nach
erfragen	尋ね出す, 問い正す	fragen X nach Y
erfröhen	～にのめり込む, ～のとりこになる	fröhen um
erfühlen	感じ取る, 感知する	fühlen nach
ergraben	発掘する, 掘り当てる	graben nach
ergreifen	つかみとる, 捕らえる	greifen nach
ergrübeln	あれこれと考え出す	grübeln an/über
erhandeln	取引により入手する, 買い取る	handeln um
erhaschen	咄嗟にかすめとる, (目や耳で) とらえる	haschen nach
erheiraten	結婚により手に入れる, 持参金として手に入れる	heiraten X wegen Y
erheischen	(前提として) 要求する	heischen nach
erheucheln	装って入手する, 偽って手に入れる	heucheln wegen
erhoffen	期待する, 待望する	hoffen auf
erhorchen	(聞き耳を立てて) 聞き取る	horchen nach/auf
erhören	(願いを) 聞き入れる	hören auf
erhungern	節食して (食費を削って) 手に入れる	hungern wegen
erjagen	狩猟により仕留める	jagen nach
erkämpfen	戦って獲得する, 勝ち取る	kämpfen um
erklettern	(てっぺんにまで) よじ登る	klettern auf
erklimmen	(努力して頂上にまで) よじ登る	klimmen auf
erkriechen	(頂上まで) 這うようにしてよじ登る	kriechen auf
erlangen	入手する, 獲得する, 到達する	langen nach
erlauern	待ち伏せて捕らえる	lauern auf
erlaufen	走って捕らえる	laufen nach
erlauschen	(耳をそば立てて) 聞き取る	lauschen nach/auf
erlosen	クジ引きで当てる	losen um
erlösen	(解放して) 救い出す	lösen X von Y
erramschen	(バーゲンセールなどで) 安く手に入れる	ramschen nach
erraten	察知する, (推察して) いい当てる	raten an
errechnen	算出する, 予測する	rechnen an
erreichen	到達する, 達成する	reichen nach
erreiten	騎行して (馬に乗って) 手に入れる	reiten um
erringen	戦い取る, 争って獲得する	ringen um
erschaffen	作り上げる, 創造する	schaffen an
erschachern	(強引に) 値切って手に入れる	schachern um/wegen
erschleichen	こっそりと (不正に) 手に入れる	schleichen nach
erschleppen	這うようにして (苦勞して) たどり着く	sich schleppen an
erschmeicheln	甘言を弄して入手する	schmeicheln um/wegen

erschnappen	(口をあけて) パクリと捕らえる	schnappen nach
erschnuffeln	(匂いで) 嗅ぎ当てる	schnuffeln nach
erschnuppern	(匂いで) 嗅ぎ当てる	schnuppern nach
erschranzen	おべっかを使って入手する	schranzen um
erschuftet	あくせく働いて手に入れる	schuftet um/wegen
erschürfen	発掘する, 掘り当てる	schürfen nach
erschwindeln	搾取する, 巻き上げる	schwindeln wegen
erschwitzen	汗を流して手に入れる	schwitzen wegen
ersehnen	熱望する, 待ち焦がれる	sich sehnen nach
ersinnen	案出する, 考え出す	sinnen auf
ersparen	節約して残す, 貯蓄する	sparen auf
erspähen	(探し求めて) 発見する	spähen nach
erspielen	試合 (プレイ) して獲得する	spielen um
erspringen	飛びかかって獲得する	springen nach
erstaunen	驚かす	X staunt über Y 〔Y erstaunt X〕
ersteigen	(頂上まで) 登りつめる	steigen auf
ersteigern	(競売などで) せり落とす	steigern auf
erstreben	努力して得る, 追求して得る	streben nach
erstreiten	戦い取る, 勝ち取る	streiten um
erstürmen	襲撃して手に入れる, 攻略する	stürmen gegen
ertappen	不意打ちにより獲得する, 現場を押さえる	tappen nach
erträumen	(獲得を) 夢見る; 憧れる	träumen von
erwandern	(風土・風物などを) 旅して知る, 旅で体験する	wandern in/durch/über
erwarten	待ち受ける, 待ち望む	warten auf
erwehren	sich Gen. ~ (～から) 身を守る	sich wehren gegen
erwerben	取得する, 獲得する	werben um
erwirken	(手を尽くして) やっと手に入れる	wirken an

上の表に示す er- 動詞を, それぞれの基礎動詞と前置詞句によりパラフレーズしても, 意味の上で, 常に, 完全に合致した表現ができるとは限らず, かなり異なる意味の表現になることがある。むしろ, 意味の上では多かれ少なかれの相違のある表現になることが多い。このことは「基礎動詞」はもとより, 「前置詞」が醸し出すニュアンスが大きく影響しているものと考えられる。

これらの「結果相」を表す er- 動詞は, それぞれの基礎動詞が要求する前置詞によって更に細分することができるであろう。



- (A) 前置詞 nach を要求する単一動詞を基礎動詞とする er-動詞は、その動詞が表す動作・行為は方向性を示すものであり、この種の動詞グループには次の下位グループのものが含まれている。
- (a) 人の身体全体が運動（動き）を示す動作・行為を表す動詞（例：erlaufen, erjagen, erspringen, erstreben, erdringen usw.）
- (b) 人の身体の一部を用いて行う動作・行為を表す動詞（例：ergreifen, erlangen, ertasten, erangeln, ertappen usw.）
- (c) 人が感覚器官（またはその一部）を用いて行う動作・行為を表す動詞（例：erfühlen, erblicken, erspähen, erlauschen, erhören, erhorchen usw.）
- (d) 比喩的に（例：erforschen usw.）

運動動詞でも、垂直方向への運動を示す動詞では、その基礎動詞は前置詞 auf を要求する（例：ersteigen）。

前者の er- 動詞タイプでは、単一動詞（基礎動詞）の場合に比して、かなりの短縮が可能になる（etw. erspringen ← durch das Springen etw. erhalten; etw. erjagen ← durch das Jagen etw. zur Strecke bringen）。〔勿論、前置詞 auf が用いられる場合、単一動詞でもある程度の短縮が可能になる場合がある（auf den Berg steigen ← auf den Gipfel des Berges steigen → den Berg ersteigen）。〕

非線形運動を示す動作動詞の場合には、数種の前置詞がそれぞれの意味に応じて用いられ、時には混用される場合もある（erwandern → wandern in/durch/über）。

- (B) 上に述べた方向を示す前置詞 auf を要求する単一動詞には warten も含まれ、それから複合動詞 erwarten がつくられるが、この単一動詞は、元来、die Warte（観測所、監視所）を語源としているものであり、かつては「知覚動詞」の一つと見做されていたものであろう。
- (C) 「動き」と結び付く行為を表す「結果相の er- 動詞」であって、獲得・収得を意味内容とするものの場合、その基礎動詞が要求する前置詞としては um と an を挙げることができる。この場合、um を要求する単一動詞が示す「動き」がはっきりと思いつかべることができる限り、その er- 動詞が示す「動き」に係わる事象も明瞭に認識し

得るであろう (erkämpfen, erfechten, erspielen usw.)。これは比喩的な用法の場合にも言えることだろう (erstreiten, erhandeln, erlösen usw.)。

- (D) 単一動詞の原義が曖昧もしくは晦渋である場合、前置詞 um は wegen と置き換え得ることが可能となろう (erschwindeln, erschuften)。しかし、そこでは、語彙の上で差異が生じてくるため、最早、共時的に基礎動詞と er- 動詞との間でパラフレーズし得るといった関係が崩れてしまうであろう (erwerben / werben um: 但し、この “werben um” は語源的には “sich drehen um” を意味する)。

他方、「動き」が限定されない場合の基礎動詞が要求する前置詞は an である (erackern, erbauen usw.)。状態動詞のうちの心的動作を表す動詞 (ergrübeln, erdenken, errechnen usw.) の場合も同じことが言える。これらの動詞の他の用法の場合にも見られるように、um と an との間には、それぞれの動詞が表す「抽象性」の程度の差がうかがえよう。ここでも、関連性がはっきりしない場合には、意味の相違が表面化することも起こり得る (erwirken / wirken an)。

時として、er- 動詞の再帰化も見られる (sich erschleppen / [sich] schleppen an) こともあれば、その逆、即ち、パラフレーズの場合の基礎動詞の再帰化も見られる (ersehnen / sich sehnen nach) 場合もある。

er- 動詞に関連して云々する場合、そのパラフレーズの際に要求される前置詞 gegen も注目するに値するものの一つであろうが、例えば sich wehren gegen X / sich X<sub>(GEN)</sub> erwehren では er- 動詞が属格補足語を要求することも形態統語的 (morphosyntaktisch) に目立った存在であろう。

- (E) 上の表の er- 動詞 の前綴 er- のなかには、若干の特殊なものがある。それらの共通点は、er- 動詞とその基礎動詞とが部分的な補完的短縮パターンを示すことである。そこでは、結合価が3価の動詞 — 例えば feilschen (mit X um Y) — が前綴 er- を付すことにより2価になり (Y erfeilschen)、その結果、文の短縮が生じるのである。そこでは、当然の結果として、補足語の格の変化も生起せしめ、例えば erstaunen の場合には、主語の変更までも引き起こしている (X staunt über Y / Y erstaunt X)。

### Ⅲ. 結び

前綴 er- は、前綴 be- よりも、それが導き出すニュアンスの違いが比較的明らかに理解

することができるが、それだけに、その前綴による文法化作用は弱いと言えるだろう。非分離前綴の場合、分離前綴の場合とは異なり、意味的に価値の低いもの、あるいは、意味的に曖昧性が強く、把握し難いものほど文法化作用が強いと考えられる。ドイツ語複合動詞の非分離前綴を、それらの文法化作用の度合いに従って配列すると ge-, be-, er-, ver-, ent-/emp-, zer- の順になるであろう。

前綴 ge- は、一般にいう「時称システム」の中へ組み入れられるものであり、前綴自体は、それ独自の特有の意味を持たない。前綴 be- は、先の拙論にて述べたように、be- 動詞としてはその場合々々に特有のニュアンスをもたらすことはあっても、前綴そのものには「意味」がなく、多くの場合に「結果相」的解釈へと導く「補足語の話題化」のための一つの指標とも見做し得るものであり、これは、ドイツ語の「格システム」に結び付くものであって、短絡的に「他動詞化」として把握されている。

前綴 er- についても、前綴 be- の場合と同様の結果が示されるということが出来るが、er- は《意味内容面での「補足的」な働き》を持ち、これが「結果相」を導き出していると言えるのではなからうか。前綴 ge-, be-, er- に比べて、前綴 ver-, ent-/emp-, zer- は「意味的」にかなりはっきりとしたものであり、それだけに文法化作用の弱いものであるということが出来る。しかし、それぞれの非分離動詞を、それらの基礎動詞としての自動詞によりパラフレーズするとき、その複合動詞の前綴が一種の指標としての存在となっているのが認められ得るのではなからうか。

#### 参考文献：

- Hans-Werner Eroms: Be-Verb und Präpositionalphrase, Heidelberg 1980  
Erik Rooth: Über die Ausdruckskraft und Aktionsarten der deutschen Verbalzusammensetzungen mit er-, Moderna Språk, 1964  
Ulrich Engel: Deutsche Grammatik, Heidelberg 1988  
Der Große DUDEN - Grammatik, Mannheim 1959  
Der Große DUDEN - Grammatik, Mannheim 1973  
Der Große DUDEN - Etymologie, Mannheim 1963  
Mackensen: Deutsches Wörterbuch, Laupheim 1955  
Wolfgang Fleischer: Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache, Tübingen 1975  
橋本文夫： 詳解ドイツ大文法 （三修社）1974  
桜井和希： 改訂ドイツ広文典 （第三書房）1972

独和大辞典（小学館）1985

中條宗助：ドイツ語類語辞典（三修社）1982

Hentschel/Weydt 著：西本・高田・河崎 訳 「現代ドイツ文法の解説」（同学社）1994